慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山口徹編『アイランドスケープ・ヒストリーズ：島景観が架橋する歴史生態学と歴史人類学』
Sub Title	Toru Yamaguchi (ed.), 'Islandscape' histories bridging a gap between historical ecology and historical anthropology
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2020
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.89, No.1/2 (2020. 10) ,p.157(157)- 159(159)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20201000-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

山口徹編『アイランドスケープ・ヒストリーズ——島景観が架橋する歴史生態学と歴史人類学——』

近森　正

島には語らずにはいられない豊かな物語があふれている。本書は慶應義塾大学東アジア研究所の「歴史生態学と歴史人類学を接合する景観史研究の拡張」というプロジェクト（二〇一五～二〇一六年）として、島を舞台におこなわれた野外調査の結果を十一人の研究者が寄せた重厚な論文集である。ここにこれを企画した編者の島に寄せる熱い思いが結実した。本書の上梓をともに喜びたい。片仮名の長い標題は編者によると島の景観史という意味だそうである。景観はきわめて多様な意味を含む言葉であるが、いわゆる関係概念であって、主体と客体がなければ成立しない。景観とは何か。序論の説明では自然と人間の絡み合いという二元論の国語的な意味が付されているが、執筆者はそれぞれの立場で解釈している。

一つ目の立場は、景観を外側からとらえる立場。景観を観察可能な客体として捉え、地形や土壌、植生などの環境要素に還元する。それによって自然科学的な手法が持ち込まれて、環境要素の詳細な分析がなされる。しかし、主体は抽象化されて、観察可能な「人為」現象とされる。層位的な発掘と年代測定によって得られた環境変遷はプロセスであっても、それがただちに歴史になるわけではない。景観史は二元論や還元論をこえた観察者の解釈に求められる。完新世の沖積化の過程において、人為作用が大きくなることは地球上のいたるところでみられる現象である。観察された変化がなぜ、島にみられる特有の現象なのか。一体、「島」とは何か。面積、規模、孤立性、閉鎖性、開放性、狭小性、資源の限定性、停滞

性などといった島嶼性は規準の取り方次第によって、いかようにも変わり得る。島を規定しておきたい。島もまた、地方（じかた）とのかかわりで認識される関係概念だからである。（近森「島が島になる島の歴史」『史学』第八八巻第一号、二〇一八年十二月）

二つ目の立場は景観を内側あるいは主体の側からとらえる立場。景観は自然である前に文化あるいは人間の側にあり、それが土地の自然に投影されて特徴的な見方をつくり出す。景観は観念のパターンとして心の中で生み出される。そこに過去の記憶が幾重にもかさなって浮かんでくることもある。その場合、主体の観念のなかに調査者の解釈が入り込み、調査者と被調査者の主体が不明確になることがある。それを分別することが可能かどうか。主体が調査者に移ってしまえば、それは文学的表現になる。それを含めて景観の歴史といえるかどうか、それは歴史の見方による。個人の記憶から集団に共有されたものをどのようにして引き出すのかという問題もある。

一つ目の立場をとるのは第一章「石垣島のジオアーケオロジー：絡み合う人と自然の景観史」（山口）と第二章「石垣島における近世琉球統治政策の景観史：近世琉球行政文書からみる名蔵地区浅層ボーリング資料の一解釈」（小林）、第四章「パラオ共和国バベルダオブ島の古植生調査」（鈴木）である。第一章は石垣島において行なった花粉分析の結果によって、シイノキ、マテバシイの森がマツ、マングローブに変化したことを明らかにして、それが人為作用の結果であることを指摘する。第二章は同じく、石垣島における植生分析によって、マングローブ湿地、水田環境に変化する過程をすでに知られている近世の歴史的事実によって解釈を試みる。第四章はミクロネシアのバベルダオブ島のボーリング調査によって、人間の初期居住から日本の委任統治時代にいたる植性変化を追い、開墾によってマングローブ林が失われていく過程を明らかにする。

二つ目の立場をとるのは第五章「道の交差と記憶の相克パラオ共和国ガラスマオ州における鉱山採掘と村落景観」（飯高）、第六章「成長する景観恋路島からみた水俣」（下田）、第七章「儀礼と観光のはざまの景観史インドネシア、バリ・アガの村落の事例から」（鈴木）、第九章「陸の景観史ツバル離島の村落と集会所をめぐる伝統、キリスト教、植民地主義」（小林）、第一〇章「実践が村空間を紡ぐ二九九五年、クック諸島プカプカ環礁社会の場合」（棚橋）である。第五章はパラオ諸島

ガラスマオにおける村落景観が日本統治の時代から太平洋戦争を経て現在にいたるまでの間にいかに変化したか、パラオの人と在留日本人、そして戦後になって島を訪れる日本人の記憶の風景の中に、それらが離合する様子を描き出す。第六章は天然の豊かな漁場であった水俣湾に浮かぶ恋路島が、水俣病の発生によって汚染された魚の墓場となり、それから環境再生の場へと変化する島の景観をたどる。第七章はインドネシアのバリ島村落の儀礼では男が島の山側、女が海側に象徴的に位置づけられる。島人の主体的な風景がとらえられている。第九章はツバル諸島ナヌメアにある集会所において、伝統的な首長、キリスト教会の牧師、行政官の坐る座席が、外洋と礁湖の方角と関係をもつことを述べる。第一〇章は出稼ぎ労働者としてニュージーランドなどに移住したクック諸島プカプカ環礁の人々について、移住先でかさねられた記憶が彼らの歴史や景観をつくりあげていると論じる。第三章「陸に上がったサンゴ漆喰からみる石垣島のシマ景観」（深山）は造礁サンゴを石材として家屋の礎石や生石灰を作って漆喰に用いている石垣島の村の風景を描く。

第八章「環礁州島の成り立ちと地球規模変動」（山野）と第一一章「水没する環礁の真実サンゴとホシズナが作る地形」（茅根）はともにサンゴ礁の最も特徴的な地形である環礁の州島に関する論考である。第八章は環礁の州島が形成される要因を地球規模の地殻変動と海面変動、それに加えて有孔虫の生息条件などを組み合わせて探る研究の現状を紹介する。第十一章は地球温暖化の影響による海面上昇によって水没の危機にあるとされるツバル諸島フナフチ環礁の州島について、環境汚染の実態と造礁力の衰退を示して、島の再生策を探る。

島の物語はまだまだ、語りつくせない。すべての論文はどれもが充実した野外調査の成果にもとづくものであり、読むものに調査地の臨場感あふれる感動を与えてくれる。十一編の重厚な論文を一気に読み通すには相当な努力を強いられるが、それは調査者の労に報いる当然の負担であろう。現地の厳しい条件のなかに身を置き、新しいテーマに挑んだ執筆者の皆さんのフィールドワークの精神と共同研究を企画し、まとめ上げた編者の卓見に深く敬意を表したい。（二〇一九年五月）

（慶應義塾大学東アジア研究所叢書　風響社刊　二〇一九年二月発行　三六二頁、五〇〇〇円＋税）